

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(49)

—第460号から第469号—

門 田 俊 夫

第460号 1712年8月18日(月曜日)

【スティール, パーネル】

見せ掛けの優秀さに眩惑される。(ホラティウス)¹⁾

欠陥や愚行は往々にして私たちには知られていません。それどころか、知られるにはほど遠い存在ですので、私たちの真価の表明として通用します。このため、私たちはそのただ中であっても呑気にしていられますし、たわいなくこれを表に出し、向上に努め、評価されようとしています。ここには数限りない奇妙な慢心や陽気なでっち上げや過度な行為が伴い、これが私たちの喜びとなり、人々に自分の好みの色を見せびらかすことになります。実際、この虚栄と根拠のない満足感を抱くことには何とも言えない楽しみがありますので、賢人たちでさえ、この魅力を表現するために誇大な言葉を選び、「愚者の天国」と銘打っています。

おそらくこの考えの後半部分は人によっては間違いだと考えて、私とは違った見方をするかもしれません。だが、今の私はこの点には関心はありません。私としては、以下、最近、空想の世界で経験したことを打ち明けることにします。

思うに、私は緑に覆われ花が咲き乱れる緩やかな上り坂となっている丘に連れて来られたようでした。その丘の広い頂には、意地悪い「誤謬」と沢山の頭を持った人気のある「評判」が住んでいました。両者は共に、魔法を使い、人々を自己愛で魅惑することで有名でした。ここへそれぞれ道は異なるのですがあちこちから大勢の人たちが足を運ぶのでした。とても自惚れた様子をした人たちは、案内人を必要とせず迷うことなく「誤謬」へと向かって行きました。また穏やかな気質の人たちは最初に人気のある「評判」へと足を運びました。「評判」は彼らを自画自賛させると、彼らを「誤謬」の領土へと送り込みました。

私たちが「評判」が住む頂上の広々とした場所まで登って行くと、「評判」は私たちより先に到着した数名の人たちをもてなしていました。彼女の声は愛想よく、喋るとき香りを漂わせていました。彼女は一人一人に合わせた話をしているようでした。誰もが自分の

1) ホラティウス『詩の技法』25

良いところを聞かされ、美点の報いとして彼女が約束する天国が待ち構えているものと思いました。このようにして、私たちはそれが授けられる場所へ彼女が連れて行ってくれるまで彼女の後をついて行ったのです。その道中、みんなはそれぞれ資質を自賛するか、際立つ資質を互いに誉めあうか、あるいはまた資質が欠けていると行ってけなしたり、張り合ったりしているのです。

やっと、「誤謬」が座っている場所の入口にある木蔭まで辿り着きました。木々が生い茂っており、彼が座っている場所は彼が見えにくくなるように巧妙に仕組まれていました。彼は白っぽい外衣をまとっており、「真実」そっくりに見えました。「真実」が光を当てることで、自然の美をその崇拝者たちの目に明らかにするように、彼はそれをまねて、錯覚で喜ばせることができるように、魔法の杖を携えていました。彼はこの杖を厳かに持ち上げ、ぶつぶつぶやきながら、魔法にかけた誉れに私たちの眼前に現れるように命じました。私たちは直ちに彼が指差した空へと目を転じました。すると、霧の晴れた夏の朝の山々のように、澄み渡った淡青色の眺めとなり、虚栄の宮殿が視界に入ってきました。

宮殿の土台はどう見ても土台には見えませんでした。魔法の仕掛けで宮殿は一連の渦巻く雲の上に建っていました。私たちが登って行く道は虹のような彩色が施されていました。進むに連れて、辺りにそよ風が吹いて来て、五感をうっとりさせるのです。壁面は一面見栄で塗り固められており、柱の下部は細く、コリント様式となっており、屋根はこんもりと盛り上がり泡に似ていました。

旅人は入口でポーターに会うことはなく、人が出てくるまで待つこともありませんでした。誰もが自らの美点が十分なパスポートだと考えて、どんどん進んで行くのです。広間ではいくつかの幻に出会いました。幻は私たちの間を動き回り、みんなをその心証で整列させました。衰えた「名誉」がいました。彼は先祖の功績という古ぼけた衣服以外には見せびらかすものは何も持っていませんでした。絶えず自らを家来にしている「誇示」や忍び足で歩く「慇懃」がいました。広間の奥には玉座があり、その天蓋は「陽気」が浪費できるように、富で輝いていました。また、ピカピカの玉座には、孔雀の羽毛で飾り立て崇拝者たちからはもう一人のヴィーナスと認められている「虚栄」が座っていました。キューピッドのように彼女の傍らに立って人々にお辞儀をさせている少年には「自惚れ」という名が付いていました。彼の目は周りのものを無視して時折心の中に向けられました。征服するために使用する彼の武器は意図する相手方から借用したものでした。兵士を狙う矢は自らの羽毛で覆われていました。才人に向けられる投げ矢には羽ペンの翼が付いていました。そして富につけ込むために放つ投げ矢の先には金庫から取り出した金が付いていました。彼は政治家のために罫を仕掛け、婦人の目から情熱を盗みそれで人々の心を溶かしました。雄弁家の舌から稲妻を盗み、彼らを煽り自らの誉れに酔わせます。玉座の足元には、偽りの三女神、白粉の貝殻を手にした「ご機嫌取り」と鏡を持った「気取り」とひっきりなしに衣服を取り替えている「流行」が座っていました。この三人は「自惚れ」が獲得した獲物を守ることに専念しました。それぞれ独自のやり方をしました。「ご機嫌取り」はあらゆるものに新たな顔の艶を授け、「気取り」は彼女の言うには俗悪でない新たな態

度と顔つきを受け、「流行」は自国の欠陥を隠し、外国の表面的な美を付け加えました。

目にしたものについて考え込んでいたとき、人込みの中から人々の状態を嘆く一つの声が聞こえて来ました。この声は「誤謬」に眩惑され、「自惚れ」に煽られた「評判」の息に操られ、諦めて「虚栄」の道の中に引き込まれ、その結果、私たちの頭上には「嘲笑」ないし「貧困」が襲って来ました。この状態が出現すると直ぐに、大きな混乱状態となり、ある箇所には割れ目が生じました。慎み深く意志堅固な一人の威厳のある老人が連れ出されたのです。彼の発した言葉が原因でこれから処分される場所でした。彼は自己弁護したようでしたが、彼の言うことに耳を傾けようとしている人は誰もいませんでした。「虚栄」は冷ややかな笑みを浮かべて彼を見ますし、「自惚れ」は怒っていますし、彼の「率直さ」を知っている「ご機嫌取り」は仮面を被り、目をそらしますし、「気取り」は扇を持ち上げ、澁面をし、彼のことを「嫉み」とか「中傷」呼ばわりをしますし、「流行」は少なくとも彼は「無作法」に違いないと言います。このように全員から馬鹿にされた彼は、優れた人物を傷つけた罪で追い出されました。今後彼はどこで出会っても好意的な扱いを受けることは絶対にないということでした。

この老人が発した警告の意味はほぼ分かっていたし、外で大きな騒音がしたときどうしたら実行されるか考えていました。すると、ハルピュイアの一团が押し寄せて来てドアのあたりが暗くなりました。家の中に「愚行」と「傷ついた信頼」が見え、「面倒」と「恥辱」と「汚名」と「軽蔑」と「貧困」がしんがりを務めていました。キューピッドと三女神を従えた「虚栄」が姿を消し、家来たちは穴の中や隅っこに駆け込みました。しかしその多くは見つけられ（近くにいる人から聞いたのですが）監獄か地下室へ連れ去られました。彼らは孤独か話し相手もほとんどないかの恥ずべき生活を送ることとなりました。しかし、彼らは、美点はその場所の輝きに似合わないか富がその出費に合わないかして、浅はかにもここで生活することになるのだと、彼は馬鹿にしたような調子で付け加えるのでした。私たちはこれまでにこういった光景を目にしたことがあります。騒動がおさまれば目にした栄光はすべて戻って来ることでしょう。私は情報を与えてくれた彼に感謝しました。そして、彼が自分の出番が来るまで頑固に居座っているものと信じて、私はドアへと向かい、何名かを追い越しました。彼らは「率直さ」に耳を傾けようとしませんでした。が、事例を示されて非常に脅えていました。彼らは敷居をまたいだとき、「誤謬」の幻惑がいなくなっているのを知って奇妙な衝撃を覚えました。明らかに彼らはこの建物が実際の土台が何もなくほんのわずか空中に吊り下がっていることに気づいたのです。最初は命がけの跳躍しかないと思い、私は何度もこんな危険な場所にやって来ることになったくだけない好奇心を呪いました。意気消沈して考え始めますと、宮殿が私たちと共に沈みこんでいるようで、まともな評価が与えられる地点にまで到達し、宮殿が地面に着いたのです。私たちはその建物から出て行き、宮殿は見えなくなりました。ところで、宮殿に滞在した人たちがこの降下に気づいていたかどうか、私には分かりません。でも、彼らは気づいていなかったのではないかというのが私の意見です。それはさておき、私の夢はここで終わり、つぎのような「虚栄」が示唆する致命的な結末について考える機会となりました。

た。

観察者殿

貴殿に、主として礼儀正しく育ちの良い人たちの間で一般に行われている重大な誤りについて再び触れていただきたいと考えてこの手紙を書いています。私の申し上げたいのは、挨拶でお馴染みの虚礼、お辞儀、膝を曲げて体をかがめる女性のお辞儀、ささやき、微笑み、うなずきなどのことです。教会ではこれで時間の大半が占められ、宗教的な集いを始めることの本分と真の意図とまったく相容れないものになっていると思われ²⁾。劇場においてもこれと同じことが言えます。海外のローマカトリック教会や礼拝堂で、私は、上流階級の人たちや近親者たちや親しい知人たちが、互いにやり過ごしているのを見かけたことが一度ならずあります。お互いにほとんど意識しませんので、その場にふさわしくかつ厳粛な気持ちになっているように見えます。少なくとも、そのように認められました。イスラム教徒たちでさえ、彼らの間違っただお祈りの集いの振る舞い方に関しては同じだと聞いたことがあります。私としては、この点に関しては、彼らの作法は私たちが真似をするに足る見上げたお手本だと考えざるを得ません。

この機会を捉えて、教会から帰ると二三百人の人々の身なりについて事細かな説明をする信者たちの並外れた記憶力について言及せざるを得ません。これは実に多様なために頭で会得するのは至難の業ですので、わずか2時間のお祈りの時間にこれができるのは私にとっては奇跡であり、その場の本分からしてみると、すべてを記憶することは不可能としか思えません。聖書では、「女はかしらに権威のしるしをかぶるべきである。それは天使たちのためでもある」³⁾と記されていますが、この後半の言葉は比喩的に用いられており、若者たちを示すのだと考える人たちがいます。この解釈が正しいとすれば、この一節は現在の私たちの意図にまったく無関係とは言えないかも知れません。

貴殿がこれについて書くことがふさわしいとお考えになるようでしたら、ご参考にしていただければ幸いです。

敬具

第461号 1712年8月19日（火曜日）

【スティール、ワッツ】

しかし、私にはお世辞と賞賛の違いは分かります。（ウェルギリウス）¹⁾

今何か別のことに置き換える時間がないので、つぎの手紙に見られます私にとっては身に余る賛辞を公表させていただきます。土曜日の紙面で見ましたようにある詩について賛意を得ましたが、高潔な人たちに聖なるテーマについて意見を述べていただく機会を提供できるのは大きな喜びです。私は同一の人が書いた詩以外は公表する積もりはあり

2) 教会でのマナーの悪さについては、第50号、第259号、第270号、および第284号にも登場。

3) 『コリント人への第一の手紙』第11章 第10節。

1) ウェルギリウス『エクロガエ（詩選）』9.34

ません。また、その記述に賛辞を加えず、そのまま掲載したいと考えます。

観察者殿

貴殿は冒瀆的な時代の嗜好を矯正する一方で、美德への関心を促し、神聖詩を楽しむようにと説いていらっしゃいます。私たちの気質は多種多様で、実に多様な宗派、党派に分かれています。どの党派、宗派、気質の人であっても、好んで貴殿の嗜好に従います。貴殿は、詩に対する貴殿の好みを、読者の受容能力に従って全員に浸透させることが可能です。貴殿がある詩に行き渡っている敬虔な感情を推奨しますと、私たちはそこに強い愛着を覚え、心の中で誇りと喜びが増して来るように思えます。そして、魂は観察者が認めていることを味わうことが可能となります。

貴殿が過日公表なさった賛美歌を読んだとき、昨日私にそれが書けるか試してみたくなりました。詩篇第114篇は賞賛に値する頌詩だと思います。そこで、私はこれをわが国の言語に置き換えることにしました。イスラエルのエジプトからの行程について語り、そこに神の存在を付け加えたとき、詩篇には、私が見失っていたまったく目新しいある美点があることに気づきました。それは、詩人が最初は神の存在を完全に隠しており、何か神性について触れることさえせず、名詞を使わずに所有代名詞で済ませていることです。ユダは主の聖所で、イスラエルは主の領地つまり王国でした。今この理由は明白で、これが必要だと思われまます。なぜなら、もしそれまでに神が現れていたとしたら、山々が踊り、海が退くことに何一つ不思議はないからです。そのため、自然の変動は当然の驚きで持ってもたらされるのです。神の名前は後になって初めて言及され、その時には、非常にふさわしくかつ威厳を持って紹介されることになります。この点が言い換えをしないで、聖なる著者の精神をできるだけ維持しながら翻訳を試みた点なのです。

もしつぎの試みがそれほど手に負えないものでなく、貴殿の目に留まるようでしたら、もっと素晴らしいものを出すかそれとも書くことをやめるかのどちらかになるものと思います。

詩篇 第114篇²⁾

I

イスラエルがファラオの手から逃れ、
高慢な暴君とその領土を離れたとき、
心からの敬意を払うこの部族の人たちは
その王を戴き、ユダがその地位に就いた。

II

彼らの旅は海にさしかかった、
海は割れ、彼らの道を作った。
ヨルダンの流れは彼らを目にして、
後へと退いた。

2) 『詩篇』第114篇。

III

山々はおびえた羊のように震え、
 小山は小羊のように踊った。
 シナイ山は立っていることができず、
 近づいている王の力が分からなかった。

IV

いかなる力が海を割り、
 ヨルダンを後退させることができるのか。
 小山よ、なぜ、お前たちは踊るのか。
 シナイ山よ、お前は どうしておびえるのか。

V

山々も海もすべて後退し、
 神が近づいているのを知るのだ。
 そうイスラエルの王が近づき、ここにいるのを
 目にし、大地は震え、崇め、恐れるのだ。

VI

彼は轟き、自然は嘆き悲しむ。
 彼は岩を水溜りへと注ぎ、
 彼の一言で火打石が噴出し、
 火も海も自分たちの主を認める。

観察者殿

貴方が半ペニーの価値しかない謙遜なさっておられることにつけ込んで、人々の前で貴方のことを中傷し、評判を落そうとしている人たちがいます。もし私が貴方であれば、創造的な仕事をして好評を得ていることを主張するに違いありません。そこで、私としては貴方を公正に評価し、貴方に代わって、貴方の著述はこれまでになく学問を育ちの良い人たちにとって必要不可欠なものしているのだと言わせていただきます。貴方が述べられています、謙遜は当世風となり、厚かましさは何らかの機知を必要とします。冒瀆、みだら、放蕩は今では適性とはならず、その持ち主でなくても不信心者でなくても立派な紳士になることが可能です。

町の人たちが貴方に2ペンスだすのを拒むのでしたら、彼らにシビルスの話を聞かせてあげて欲しいと思います。町の人々には、こういった厳粛な新聞はその3分の2が壊滅された後でも、すべてが揃っていたときと同じように評価されたのだということを知らせて下さい。私たちの多くは貴方のことを高く評価していますので、貴方に非協調的な読者には3ペンス未満では手に入らないと知らせることが出来ます。貴方は進んでベリサリウスのことを紹介できるのです³⁾。小ざかしい連中は、貴方のいなくなったコーヒーハウスへ

3) ビザンティン帝国の将軍ベリサリウスは、老齢になって慈悲を請わざるを得なくなったと言われて

群れをなしてやって来ます。私としては、貴方の才覚に屈しない連中に一泡吹かせてやって欲しいのです。

敬具

追伸：最近、靴墨⁴⁾と髪の色め粉⁵⁾と手に塗る軟膏⁶⁾と顔につける化粧水⁷⁾などの巧妙な創始者がいることを知りました。彼らは貴方の固定客になるものと思います。そこで貴紙に広告を載せてもらいますと、貴紙が人々の内面を飾りますように、これらは人々の外見を飾るのに貢献するのです。

第462号 1712年8月20日(水曜日)

【スティール】

人が所有できる最も大切なものは友人である。(ホラティウス)¹⁾

付き合いでの言動が相手に与える大きな力に気づいている人はいません。一般に欠陥は知人たちからは大目に見られますし、絶えず行状に伴うある種の軽率の方が、気配りはその資質のない人々に与えるよりもうまく運びます。ダシンサスは些細なことでも大切なことでもことあるたびに約束を破ります。このひどい資質をたっぷり毒づかれると、みんなは「なんののかんと言っても、彼は実に愉快な奴だ」で話を締め括ります。ダシンサスは気難しい夫ですが、当の婦人たちは彼について馴れ馴れしく喋った後で「でも結局、彼はとても愉快な人だ」で結びます。ダシンサスは、名声、礼儀正しさ、育ちの良さ、あるいは善良さについては申し分がないというわけではありませんが、「でも彼は愉快な人だ」という返事が返って来ます。この資質に男らしく高潔な心情が伴っているのが際立ちますと、確かに、こういった人物の陽気さほど喜びを与えてくれるものはほかにはありません。しかし、一方だけで、嫌な資質のうわべをつくらうだけになっていますと、愉快な仲間としては何があっても避けたい人物となります。実に愉快な人物はあなたの評判を物笑いの種にし、あなたの性格をさげすみ、あなたの妻や娘を誘惑しますが、ほかの人たちからは彼が姿を見せるところではどこでも歓迎されます。この性格の人たちは自分自身の満足感を得ることに気を使い、他人の心配事や悲しみにほとんど同情を寄せないのがごく普通です。いなそれどころか、他人の苦痛を犠牲にして自らの喜びを手に入れることが出来ます。ところで、この手の人を用心深く考えない人たちは否応なしにその人に取り込まれてしまいます。つぎの手紙の書き主はその点を取り上げ、イングランドの野放図な振る舞い

いる。

- 4) 靴墨については、第108号に最初の広告が載り、その後第545号まで26回広告された。
- 5) 髪の色め粉については、第344号、第347号、第348号、第353号、第499号、第500号と広告が掲載された。
- 6) 軟膏については、第25号、第48号などに広告が掲載された。
- 7) 化粧水については、第25号、第48号などに広告が掲載された。
- 1) ホラティウス『諷刺』1.5.44

はひとえに愉快的な性格の持ち主である君主の思うままになってきたためなのだとことをほのめかしています。

観察者殿

あらゆる人間が当然のように屈服し、実にさまざまな仮面をつけて登場する感情としては、自尊心に勝るものはありません。自尊心というものは習慣や心構えのすべてに見受けられます。害をもたらすか有益かといったことは問題ではないのです。徳高く賞賛に値する自尊心といったものがあるのでしょうか。この感情は誤った用い方をすれば、お世辞を言う人に簡単に屈服してしまいます。威張らないで気持を静めることができる人は、とりわけお世辞を言う人が目上の人の場合は、簡単に魂を売り渡してしまいます。

「陽気なチャールズ2世」との称号のついた先のイギリス王に、この実例がいろいろ伺えます。この君主は生来とても気さくな人で、人と会うのをとても楽しみにしました。臣民にとっては、実際には沢山あったに違いないのですが、彼の美德よりも、人々の虚栄心を大いに満足させるこの楽しい気質の方が効を奏したのです。彼は強力な王だったのですが、喜んで冗談を言い合いました。権力を乱用したくなるこの幸運な気質を持った君主は、人々の不利益にならない限り、何でも受け入れることが出来ます。ところで、この善良な王は、国民については、たいていの場合この誘惑的な気質を無邪気に使いこなしました。彼は大望よりも喜びを追求したことは周知のことです。彼は闘鶏、競馬、舞踏会、および芝居では第一人者であることを得意がっていたようです。そういった機会にはとても楽しそうにしており、つねに見物人たちの心を和ませました。ロンドン市長就任式では善良なロンドン市民たちと何回も食事を共にしました。サー・ロバート・ヴァイナーが市長になった年もそうでした²⁾。サー・ロバートは非常に忠実な人物で、もしこういう言い方が許されるならば、彼はこの君主が大好きでした。君主から目を掛けられていることへの喜びやら、立て続けに王室への乾杯をしたために生じた興奮やらで、市長閣下は陛下への甘えが生じ、公の場ではまんざら礼儀正しいとは言えない馴れ馴れしい態度を取り始めました。王は苦境から逃げ出す方法を熟知しており、みんなにそれとなくその場を離れると言ってこっそり抜け出し、市庁舎の中庭に待たせてあった馬車へと向かいました。しかし、市長は王と一緒にいるのが大好きで、とても懇意になっていましたので、急いで彼を追い掛けて行き、王の手をしっかりとつかみ、「陛下、戻ってもう1本空けましょう」と激しい口調で叫んだのです。この快活な君主は肩越しに彼に優しい眼差しを向け、微笑み優しく（私はそのとき彼を見たのですが）古い歌の「酔っ払った彼は王のように偉大だ」³⁾という1行を繰り返すのでした。そして直ぐに引き返し市長閣下の言うことに応じたのです。

観察者殿、私がこの話をお伝えするのは、申し上げましたように、私がこの出来事を目撃したからなのです。請合いますがこれは真実ですが、よくあることではありません。この続きをお伝えしますと、貴方は私よりもっともな根拠を持っていると思われるに違いあり

2) サー・ロバート・ヴァイナーは、1674年に市長になった。

3) 流行り歌。

ません⁴⁾。その後、この市長はストックス・マーケットに陽気な君主の像を建立し、君主のために多大の貢献をしました。市長の一族が莫大な財産を国庫に保管してもらったのはひとえにこの王の気質のお陰だったのです。この君主が人の良い腰の低さをいろいろ発揮したことは広く知られています。彼の性格について書き記したある著名な人物は、彼について「彼の治世を通じて、彼は15分だけ王であった⁵⁾」と巧みな表現をしています。彼なら愚か者でも半狂人でも訪問を受け入れるでしょう。私はこれまで、チャールズ2世の御前でボクシングをした人、木刀で試合をした人、酒を飲んだ人に出会ったことがあります。要するに、この君主はとても愉快な人で、彼の統治下では誰一人悲嘆に暮れることは出来ません。このため、嫉みはすべて考えられないほど簡単に抑えることが出来ますし、どこから見ても愛想の良い彼をひどいと考える人は皆無です。私としましては、最近貴方が寄稿者たちに行なった要請に応じて、お馴染みのこの君主の史実の抜粋をお送りするのがふさわしいと考えた次第です。

敬具

第463号 1712年8月21日(木曜日)

【アディソン】

覚醒している感覚を持つには楽しみが必要だが、
夢には空想が必要となる。狩人は仕事で疲れきって休むとき、
まどろみながらも獲物を追い求める。
競争者も戦車の御者も、夢の中でスピードをあげ、
裁判官はベッドの中で証拠をまとめる。
私自身は楽しい研究に専念しているため、
眠りの中で文を書いていることがよくある。(クラウディアヌス)¹⁾

最近、私はユピテルがヘクトルとアキレウスの運命を量るホメロスの天秤²⁾とトゥルヌスとアイネーアスの運命を量るウェルギリウスの一節³⁾を比較してみました。そして、これと同じことが東洋ではどのようなになっているのか考えました。聖書の崇高な一節では、「バビロンの偉大な王が死の前日、はかりで量られて、その量の足りないことが露にされた⁴⁾」となっています。聖書のほかの箇所では、神は「てんびんをもって、もろもろの山をはかり⁵⁾」とか「風に重さを与え⁶⁾」とか「雲のつりあい⁷⁾」とか「もろもろの行いは主に

4) チャールズ2世に関するこの逸話の出所はつかめていないが、いろいろな著者が盛んに引用した。

5) バッキンガム公ジョン・シェフィールド(1648-1721)「チャールズ2世の人柄について」参照。

1) クラウディアヌス27(Panegyricus de Sexto Consulatu Honorii Augusti; Praefatio), 1-6, 11-12

2) 『イーリアス』8.68-72

3) 『アイネーイス』第12歌 725-7行。

4) 『ダニエル書』第5章。

5) 『イザヤ書』第40章 第12節。

6) 『ヨブ記』第28章 第25節。

よって量られる』⁸⁾とか「同時にわたしの災いも、はかりにかけられるように」⁹⁾となっています。以前の紙面で述べましたように¹⁰⁾、ミルトンは上述のこういった例に注目し、あの美しい描写で、天使長ガブリエルとサタンは戦闘に取り掛かろうとしているが、天に懸かる天秤によって、この戦闘の結末を量り、別れさせられたのだと語ります。

もし、永遠^{とこしなえ}の神がこのような凄惨な闘争を防ごうとして、即刻、大空の一角に黄金の天秤^{はかり}を懸け給わなかったならば、だ。この天秤^{はかり}は今でも乙女座と蠍座の間に見えるのだが、神が創造^{つく}り給うた一切のものを初めて測定して宇宙に懸っているこの球状の地球をそれと程よく釣り合った大空と均衡を保つようにされたのも、そして現在なおすべての紛争や戦争や領土についてもその測定をされるのも、この天秤によってなのだ。神は、この時、二つの重さを、すなわち、このまま戦わずして別れるか、それとも一戦を交えるか、その各の結果を天秤にかけられたが、後者が忽ち跳び上り、竿を蹴った。それを見たガブリエルは、悪魔に向かってこう言った。

「サタンよ、わたしは汝の力を知っているし、汝もわたしの力を知っている。だが、どちらの力も自分自身の力ではなく、与えられたものにすぎない。とすれば、己の武勇を自慢するのは愚の骨頂といわねばならぬ！ 汝の力も、そして、今や倍化して、汝を泥土の如く蹂躪するに足るわたしの力も、要するに神の許し給う限度以上には出ないからだ。その証拠には、あれを、あの天^{じるし}の徴を見て、自分の運命を読みとるがよい。汝は測られており、抵抗してもいかにそれが軽微なものが示されている」。悪魔は空を見上げ、自分を測る秤の一方が跳ね上っているのを知った。

問答無用であった。眩きつつ逃げた。彼と共に「夜」の影も逃げた¹¹⁾。

眠りつく前しばらくこういった楽しい思いに耽っており、それを私の平凡な考えとつき合わせていましたので、とても奇妙な夢想へとつながっていきました¹²⁾。どうやら、私は上述の思索に耽っていた書齋に引き戻され、肘掛け椅子に座っていたのでした。傍らにはいつものようにランプに火が入っていました。私はここで道徳について考え、日々皆さんに提供する題材として、さまざまな美德と悪徳というものに思いを馳せていましたら、私

7) 『ヨブ記』第37章 第16節。

8) 『サムエル記上』第2章 第3節。

9) 『ヨブ記』第6章 第2節。

10) 第321号参照。

11) 『失樂園』第9巻 996-1015行。

12) 第321号参照。

の目の前に黄金の天秤が黄金の鎖でぶら下がっているのが見えました。その時、突然、天秤の双方に大きな重石が載ったのです。この重石を調べてみると、それは人々に重んじられているあらゆるものの価値であることが分かりました。一方に知恵、もう一方に富を載せてみました。すると、相対的には後者が軽く、直ちに「跳ね上がり竿を蹴った」のです。

ところで、先に進む前に、これらの重石は黄金の天秤に載せるまでは本来の重さを発揮しなかったのだと読者にお知らせしておかなくてはなりません。そのため、手に持っていた間は、どちらが軽いか重いかは分かりませんでした。このことはほかの例からも分かりました。一方に、「永遠なるもの」と記された重石を載せてみたのです。もう一方に、時間、繁栄、苦悩、富、貧困、関心、成功と、手の中ではとても重いと想われたその他の重石を載せたのですが、天秤を動かすことは出来ませんでした。また、太陽や星や地球の重石の助けを借りても勝つことは出来ませんでした。

天秤の皿を空にして、一方の皿に肩書きと名誉、さらに華麗、勝利ならびに同種のいろいろな重石を載せました。そして傍らにきらきら輝く小さな重石があるのに気づき、それをもう一方の皿に載せました。すると、私はとても驚いたのですが、この両者はびたりと釣り合いがとれ、均衡状態を保つのでした。このきらきら輝く小さな重石の端には「虚栄」という銘が入っていました。同じ重さでぴったり釣り合う重石はほかにもいくつかありました。「強欲」と「貧困」、「富」と「満足」などがそうでした。

同様に、形状が同じで、互いに類似しているように見えるが、天秤にかけるとまったく異なる重石もいくつかありました。「宗教」と「偽善」、「術学」と「学識」、「機知」と「活発」、「迷信」と「帰依」、「厳粛」と「英知」などがそうでした。

両側に文字が記入されているひとつの特殊な重石があるのに気づきました。それを読んで見ると、一方は人間の言葉で書かれ、その下に「苦難」とあり、他方は神々の言葉で書かれ、その下に「祝福」とありました。この重石の本来の価値は私が想像する以上に大きなものでした。なぜなら、この重石は手の中ではほかのものよりはるかに重い「健康」、「富」、「好運」、および、その他の重石よりも重かったからです。

スコットランドには「1オンスの生来の才知は1ポンドの学識に値する」¹³⁾という格言があります。生来の才能という重石と学識という重石の違いが分かったとき、この格言が真実をついているのに気づきました。この二つの重石について考えたことで、新たな発見をすることになりました。生来の才能という重石は学識よりもはるかに重いのですが、両者を同じ天秤で実際に量ってみますと、生来の才能は学識の重石よりも百倍も重いことが分かりました。「信仰」と「道徳」にも同じことが伺えました。個別には道徳は信仰よりも重いのですが、信仰に道徳が結びつきますと、道徳には千倍の重みが加わったのです¹⁴⁾。この奇妙な現象は、「機知」と「分別」、「哲学」と「宗教」、「正義」と「人間性」、「熱意」と「慈善」、「感覚の深み」と「文体の明瞭さ」などなどの点においても明らかです。これ

13) 「1オンスの生来の才知は1ポンドの学識に値する」(落ちた後で高みを恐る)。この諺の初出は1690年。

14) 第459号参照。

らについては際限がありませんので、本日の紙面では省略します。

夢の場合、真剣なことに馬鹿げたこと、陽気なことに真面目なことが混ざることがよくありますので、どうやらもっと馬鹿げた実験をいくつか行なったようでした。その一つはイングランドの8つ折り判の本はフランスの2つ折り判の本より重みがあるのだということでした。さらにもう一つは古のギリシアやラテンの著者の方が現代の著者の全著書よりも重いということでした。わが『スペクテイター』紙がそばに置いてあるが目に入りましたので、それを天秤皿の一方に載せ、片方の皿に2ペンスを載せてみました。読者は本日の紙面で述べました最初の試みを覚えておられるなら、その結果をお分かりいただけるものと思います。その後、男と女を秤にかけました。でも、男女それぞれに迷惑を掛けるのは私の関心ではありませんので、この実験の結果をお知らせすることは容赦していただきたいと考えます。トーリーとホイッグの主義を入手する機会がありましたので、それを天秤にかけてみざるを得ませんでした。しかし、私は終始『スペクテイター』紙の中立性を宣言して来ましたので、この件についても沈黙したいと思います。もっとも、一方の重石を調べてみますと、そこには大文字でTEKEL（重量不足）と刻まれているのが目に入りましたが。

ほかにもいろいろ実験をしました。本日の思索にそれをすべて採り入れる紙幅はないにしても、また別の機会のために取っておくことは可能です。目覚めたとき黄金の天秤がなくなっているのが分かり残念に思いましたが、今後は、この教訓を忘れないでおきたいということだけは付け加えておきたいと思います。つまり、何事も見掛けで馬鹿にしたり評価したりせずに、それぞれの本物のかつ本来の価値にしたがって判断し、気持の整理をしなくてはならないということです。

第464号 1712年8月22日（金曜日）

【アディソン】

中庸を選ぶ人たちにとっては、波は穏やかで、
空は澄み渡っている。彼らには貧者の避難所の粗悪さがなく、
偉人たちの家をうらやんだ。(ホラティウス)¹⁾

私は広まっていなく、引用でも出会ったことのない古のギリシアやラテンの著者の文章が目にとまると非常に満ち足りた気持になります。こういった一つに、テオグニスの美しい格言があります。「悪徳は富、美德は貧困によってそれぞれ覆い隠される」²⁾。これを文字通りに訳しますと、「人々の中には、富で悪徳を隠す人もいれば、貧困で美德を隠す人もいる」ということです。誰にでも分かっていることですが、財力によって過失や欠陥を完全に隠すとまではいかないが、大目に見られている裕福な人たちの例があります。美点

1) ホラティウス『頌詩』2.10.5-8

2) テオグニス『悲歌』1.1061-2 テオグニスは紀元前6-5世紀のギリシアの詩人。

が貧困の中で見失われている貧者の描写では賢人の言葉ほど自然なものは見つけられない、と私は思います。「ここに一つの小さな町があって、そこに住む人は少なかったが、大いなる王が攻めて来て、これを囲み、これに向かって大きな雲梯を建てた。しかし、町にひとりの貧しい知恵のある人がいて、その知恵をもって町を救った。ところが誰ひとり、その貧しい人を記憶する者がなかった。そこでわたしは言う、「知恵は力にまさる。しかしかの貧しい人の知恵は軽んぜられ、その言葉は聞かれなかった」³⁾。

知恵を得るには、中程度の状態が非常に有利な位置を占めているように思えます。貧困は必要な物を調達するゆとりがなく、富は贅沢な生活を楽しむことで精一杯です。カウリーがあるところでは言うように、「常に戦っている、あるいは、勝利感に浸っている人は真実を落ち着いて直視するのは難しい」⁴⁾ のです。

人々の心に美德あるいは悪徳を生み出す傾向がある貧困と富について考えて見ますと、貧困から生じるものと富から生じるものとの間には大きな違いがあることに気づきます。たいていの場合、謙遜と忍耐、勤勉と節制が、貧しい人の素敵な資質となり、裕福な人の場合は、これが人情と善良さ、寛大さと名誉を重んじる心となります。一方、貧困は嫉みを、富は傲慢を露呈する傾向があります。貧困に欺瞞、邪な追従、愚痴、不平不満のつぶやきが伴うことがよくあります。そして富は、しばしば、自尊心と贅沢、愚かな心の高揚感、そして現世への絶対的な愛着を露呈します。要するに、美德を向上させるには中程度の状態が一番ふさわしいのです。以前にも述べましたように、中程度の状態が知識を獲得するには最も有利なのです⁵⁾。アグルが祈りの基盤にしたのはこの点だったのです。その知恵は聖書に記録されています。「わたしは二つのことをあなたに求めます。わたしの死なないうちに、これをかなえてください。うそ、偽りを私から遠ざけ、貧しくもなく、また富みもせず、ただなくてはならぬ食物でわたしを養ってください。飽き足りて、あなたを知らないといい、「主とはだれか」と言うことのないため、また貧しくて盗みをし、わたしの神の名を汚すことのないためです」⁶⁾。

本日の紙面の残りの部分はギリシアの喜劇作家アリストファネスの戯曲に登場するとても素敵な寓話について記したいと思います⁷⁾。この一部は上述の富と貧困についての一種の比較のように見えますが、元々裕福な人への風刺として考えられたようです。

年老いた善良な人で、この上なく貧しいのですが、息子にいくばくかの財産を遺したいと考えたクレミュラスは、この件でアポロンの神託に伺いをたてます。神託は神殿から出て最初に出会った人について行くようにと彼に告げます。彼がたまたま出会った人物は、見たところ、みすぼらしく年老いており、盲目でした。あちこち彼について回っていたと

3) 『伝道の書』第9章 第14-16節。

4) カウリー『王立協会に寄せて』107-8

5) 第287号参照。

6) 『箴言』第30章 第7-9節。

7) プルートスは富を司る盲目の神(ギリシア神話)。アリストファネスの『福の神』は紀元前388年に上演された。

き、彼の告白によれば、自分は富の神プルーツスであり、惨めな人の家から出て来たところであることが分かりました。プルーツスが付け加えたことによれば、自分が少年の頃、成人したら徳高く正しい人にしか富を配分しないと言っていたのだということでした。これに対して、この決意がもたらす有害な結末を考慮したユピテルは、彼から視力を奪い、クレミュラスが会ったときのように盲目の状態で各地を放浪させたのでした。クレミュラスはプルーツスをやっとのことで説得して、自宅に連れて来ました。そこには、長年客人となっているボロボロの衣服を身につけた「貧困」という名の老婆がいました。この老婆は簡単には出て行こうとしないので、クレミュラスはもし言うことを聞かないのなら、この家からだけでなく、ギリシアから追放すると威嚇しました。この時、「貧困」は年老いた主人に向かって、出て行かない理由を懸命に訴え、もし自分が国から追い出されるようなことになれば、この国の商売も芸術も科学もすべて連れて行くと言います。そしてまた、もし誰もが豊かになれば、彼らには裕福な人が望む誇示も装飾品も便利さも与えられなくなると言います。同様に彼女は、彼女が信奉者に与えるいくつかの利点を説明しました。つまり、姿、健康、行動という点では、信奉者を痛風や水腫や見苦しさや不節制から守ってやるということでした。しかし、彼女が何を言っても、最後には彼女は強制的に立ち去らざるを得なくなりました。クレミュラスは直ちにプルーツスの視力を回復する方法を考えました。そして、視力の回復および奇跡で名高いアスクレピオスの神殿⁸⁾に彼を連れて行きました。これによって彼は視力を回復し、視力を正しく用いることで、神々に敬虔であり、人々に公正な人を豊かにし、一方で、不信心でそれに値しない人から贈物を取り上げることになりました。これは愉快的な出来事をいくつか生み出します。最終幕では、善人が豊かになって以来ユピテルの神官が認めている捧げ物を受け取っていないという数多くの「不満」と一緒にメリクリウスが降りて来ます。この神官は先の革新以来飢餓状態となり、この職では生活できないという「諫言」と一緒に登場します。この芝居の冒頭で貧しいながらも信心深かったクレミュラスは、最後に、自分だけでなく豊かになった善良な人たち全員で、厳粛な行列を作ってプルーツスを神殿まで連れて行き、ユピテルの代わりに彼を奉ろうという提案をします。この寓話はアテネの人たちに二つの、つまり、一つは、富を普通に分配するというで神の行為を立証しているということ。二つ目として、富というものはその所有者の行状を墮落させる傾向があるという教訓を残したのです。

第465号 1712年8月23日(土曜日)

【アディソン】

いかに生きるか、どうしたら平穩に過ごせるか、
 激しい欲望、絶えざる貧しさで心の安らぎを乱してはいけない。
 恐怖で動揺しても、心配事で心を乱してもいけない。
 熱烈な希望もほとんど役には立たない。(ホラティウス)¹⁾

8) アスクレピオスはギリシアの英雄で医の神。

先週の土曜日には信仰の素晴らしさについて述べましたので、本日は、信仰を強化し確固としたものにするためのふさわしい方法について述べたいと思います。信仰ということで問題になっている双方が記している論争の書を読むのが好きな人たちは、信仰が定着した不変の習慣となることは稀です。ある日、信仰の持つ重要な真理に心から納得しますが、翌日にはその真理を揺さぶり、かき乱す何かに出会います。眠っていた疑念が蘇り、新たな問題が顔を出します。論争で絶えずかき乱されている心は一度落ち着くことになった理由を忘れ、新しい形となり、書き手が異なると、往々にして以前抱いていた困惑に襲われて、落ち着きを失くしてしまいます。真理の探究ほど賞賛に値するものはありませんが、私たちにとって最も重要なことで何も決めずに一生を過ごすことほど馬鹿げたこともありません。確かに、同意を差し控えるようなことはいろいろありますが、私たちの生き方を左右することで、最も安全かつ確実と思えることに合意せずに判断に迷うことはこの上なく馬鹿げています。それゆえ、私が定める最初のルールはつぎのようになります。読書や講話から、何らかの信条の真理や信念の妥当性を完全に納得したときには、その後は決してそれに疑義を差し挟むべきでない、ということです。おそらく確信するに至った論拠は忘れるかもしれませんが、その論拠の説得力は記憶に留めておくべきであり、その論拠がいったん生み出した確信は持ち続けるべきです。このことは一般の芸術や科学で実行していることにほかなりません。知性の弱点や限界を考慮すれば、他に方法はあり得ません。イングランドに改革をもたらした輝かしい殉教者の一人であったラティマー²⁾は、メアリ女王の治世に、プロテスタントとローマカトリックの高名な学識者たちが開いた例の重要な会議でそのように振舞ったのです。加齢で能力が減退しているさま、および、信仰の選択で振り向けられていたすべての論拠を思い出すことができないと分かっているこの老教師は、理性の力で敵対者を困惑させることは能力と学識を十分備えている仲間の手に委ねたのです。彼自身は、敵対者に彼が堅く信じている信条を繰り返すだけでした。そしてそれを告白することで死ぬ決意をしたのです。数学者が一度証明した命題に基づいて研究を進めるのも同じことです。証明は彼の記憶から抜け落ちたかもしれませんが、証明されたことは分かっていますので、彼はその真理をもとに進んで行くのです。このルールは、意志薄弱な人にとっては絶対に必要であり、この上なく有能な人にとってもある程度必要です。しかし、有能な人に対しては、第二のルールとして、この上なく説得力があると思え、不信心者が抱くあらゆる疑念やあらゆる探しても論破されることのない論拠を記憶に貯めておき、常に準備しておくべきだと提案します。

第三のルールとして、信仰を強化するには道徳に勝るものはありません。信仰と道徳は、当然、双方を生み出します。真理であることが自らの利益に反しないと考える人は、素早く宗教の真理を確信します。現在与えられている喜びや今後も期待する幸福のお陰で、「願っていることを信じるのは簡単なことだ」というありきたりの所見にしたがって、強

1) ホラティウス『書簡詩』1.18.97-99

2) この箇所は、主教ギルバート・バーネットの『イングランド教会改革史』(1681)による。

力に信じることになります。健全な理性の持ち主が宗教に合意するには公平な検討を加えて初めて可能になるというのはごく確かなことです。同時に、信仰は私たちの中で生きており、思索よりも実践から力を増すのも確かなことです。

とはいえ、上述のルールよりも説得力のある方法があります。それは神への崇拝を常習的なものとし、心の中でも外観でも絶えずお祈りを捧げることです。敬虔な人は信じるだけでなく、神の存在を自覚します。実際に神を感じますし、その体験は理性と重なります。神との交わりにおいて何度も神を目にしますし、現世においては、信仰心を失くさんばかりの勢いです。

信仰に生命力を与えるために、私が触れておきたい最後の方法は、頻繁に世間から隠遁し、宗教的な瞑想を友とすることです。夜の闇の中で何事かを考えますと、それがどんなに深遠な考えであっても、夜が明けるとすぐに消えてしまう傾向があります。絶え間なく五感を働かす必要があり、注意をそらす昼間の光と騒音は、夜の静寂と闇の中で力強く刻まれた考えを心の中から拭い去ってしまいます。同様に、人込みの中にいるときと一人でいるときとでも違いがあります。大都市では押し寄せて来るさまざまな物体に囲まれて、心は圧倒され当惑します。この上なく大切なことを落ち着いて考えることは出来ません。現世の心配事や喜びがあらゆる思考に横から口を差し挟み、多くの邪なお手本が、私たちの愚行にある種の正当性を与えます。隠遁では、あらゆることを真剣に受け止めることになります。宮廷やシティーでは、人々の業に接して楽しめますが、田舎では神の御業を楽しむのです。一方が芸術、他方が自然の領域です。信仰と崇拝というものは、目に入るあらゆる物に神の力と知恵を感じる道理をわきまえたあらゆる人の心に芽生えます。神は天と地の形成において、自らの存在の最高の論証を提示しました。これは、人間に関する諸事の喧騒とあわただしさから逃れた分別のある人が気を配らざるを得ない論拠なのです。もし人間が地下で生き、そこで芸術および技巧を要する作品と交わり、その後でささげるもののない太陽の輝く世界に連れて来られ、天と地の栄光を目にすれば、すぐさまその栄光はすべて神の御業だと言うだろう、とアリストテレスは言っています³⁾。詩篇作者ダビデは、「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日はかの日につたえ、この夜は知識をか夜につげる。話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶ」⁴⁾と高揚した調子でとても美しい描写をしています。こういった力強く崇高な思考は頌詩にとっても気高い材料を提供します。

I

天にある広々とした大空、青々とした天上の空、
光輝くもろもろの天と天の粹組みよ、
これらは原初から宣言しているのだ。

3) キケロは『神々の本性について』2.37.95で、アリストテレスの現存していない論文『哲学について』を引用した。

4) 『詩篇』第19章 第1-4節。

疲れを知らぬ太陽は、日々、創造主の力を示し、
すべての地に神の御業を知らせているのだ。

II

夕闇に覆われるとすぐに、月がこの素敵な物語を引き継ぎ、
夜な夜な耳を傾ける地に誕生の話を繰り返して聞かせる。
もろもろの星が周りで光を放ち、
もろもろの惑星も順番に便りを伝え、
世界中にこの真理を広める。

III

だが、厳粛な静寂の中、この暗い地球の周りを
動くものは何か。また、光り輝く星星の中を声も出さず
音も立てないでいるのは何か。理性の耳には届く、
それらが発する栄光に満ちた声が。
それは光り輝きながら歌っているのだ、
わたしたちを造り給うたのは神なのだと。

第466号 1712年8月25日(月曜日)

【ステイール】

その歩みはまぎれもなく女神であることを明かした。(ウェルギリウス)¹⁾

ウェルギリウスの英雄アイネーアスは、辿り着いた所はまったく未知の場所でしたが、その森の中で道に迷ったとき、狩人の服を着た婦人から声を掛けられます²⁾。彼女は彼に、自分と同じ身なりをした娘を見掛けなかったか、その娘は女狩人の習わしによって森の中で獲物を追っているのです、と尋ねます。アイネーアスは彼女の美しさに敬意を表して答え、自分はそういった人を見掛けてはいない、と言います。そして、あなたは女神に違いない、この地に不案内な自分を導いて欲しい、と言います。彼女は一目見たときから人間以上の存在であることは明らかでした。彼女は確かに女神だったのですが、ウェルギリウスが彼女を美の女神としたのは彼女が体を動かしてからのことなのです。彼女が体を動かしたとき、魅力はふんだんに発揮され、頭先の先から足の先まで体全体が優美に輝きます。私がダンスの上手な人を熱心に称えているのも『アイネーイス』のこの箇所の子供のせいなのです³⁾。芸術はすべて自然の模倣ですが、自然が心地よいときには最高に素晴らしい模倣となります。ダンスというものは美を示すことです。そのため、ゆがみとか物真似といったものはすべて喜びではなく嫌悪を惹起させます。ところで、それ自体優れているものには、つねにいかさまやうわべだけの模倣が伴います。したがって、詩の世界で、アナグラ

1) ウェルギリウス『アイネーイス』1.405

2) 『アイネーイス』1.314以下。

3) 第334号、第370号、第376号参照。

ム（字など）やアクロスティック（文字など）を書くことに熱心な愚か者がいるように⁴⁾、ダンスの世界でも、抜きん出ようとして他人のやれないことがやれると考えている詐称者がいます。こういった人物は、腕が鈍らないようにするために、針の穴に小麦の粒を通すコツを修得した人物と同じ報いを受けるべきです⁵⁾。わが国の舞台に立つダンサーたちはこの点で非常に間違っています。観客には痛くて無理だが観客を喜ばそうとして体を無理矢理よじらせる姿勢は理解できません。プリンス氏は、そう仕向けられれば、ダンサーたちをうまく立ち回らせる才能があります⁶⁾。彼が創案するダンスでは、演じる役柄をしっかり注視しているのが分かります。彼はダンサーに他の誰もやったことのないような動きではなく、演じる役柄にふさわしい動きをさせて観客を喜ばせようとします。彼はおどけ者やのろまにはぎこちない動きをさせます、つまり、彼らには彼らが魅力だと思っている動きをさせるのです。私は彼のダンスを見たことがあります、彼のダンスには喜劇作家に有益なヒントがあると思います。この演技は自然そのものだからということで、自分たちの優秀さを考えていない人たちを喜ばせます。他人の歪んだ動きは、自然に矛盾しているために不快なのだという理由が分からない人たちの気分を害します。

ダンスに秀でることにはえも言われぬ利点があると考え、これがこれほど無視されているのを見るのは異様です。この件に関して、つぎの手紙にはごく自然な点が伺えます。
観察者殿

私は娘を一人抱えた男やもめです。娘は生まれつきお転婆で、しつけるには若い女性を雇い入れて彼女の面倒を見てもらうしか方法がありませんでした。私は仕事をしており、しばしば留守にせざるを得ないのです。隣人たちが言うには、私の留守中に、わが家のお手伝いが近所の元気の良い召使たちを集めて宴会をしており、その間娘は通りに出て遊んでいるとのことでした。事実をありのまま申し上げますと、かつて11歳の娘が男の子たちと一緒に「コイン投げ」⁷⁾をしているのを目撃したことがあります。このことで、私は娘のことを考え直し、寄宿学校に入れ、とても思慮深い淑女に生活費を渡し、娘の付添いになってもらうことにしました。娘のことはほとんど気にかからなくなり、時々元気で無事になっている娘に会い、満足しました。ところが、最近、しつこく懇願されて、舞踏会に出掛けることになったのです。今や15歳になったお転婆娘が誘われているのを見たときの私のひ弱な心に宿った不安な気持を貴方にどのようにお伝えしたらいい分かりません。これまで、父親としてこれほど強烈な心痛を感じたことはありませんでした。かりに私の全財産が危険に晒されたとしても、これほど苦しまなかったに違いありません。娘はこれまでになく礼儀正しいおしとやかさを備えていたのです。そして、その場にいる誰よりも私のことを気遣っているかのように、敬意を込めた眼差しを向けますので、私はうなずきま

4) アナグラム、アクロスティックについては、第60号参照。

5) この出来事については、バイルは「マケドニア」で、モンテーニュは『隨想録』で引用。

6) プリンスたちによるモリスダンスは、8月5日、ドゥルーリー・レイン劇場にて発表される。

7) 「コイン投げ（穴一）」Chuck-Farthing は、的に最も近くコインを投げた者が全コインを穴に投げ、入った分を獲得する遊び。

した。私が思いますに、それで彼女は元気そのものといったふりをしました。そして、気品のある表情を見せるのでした。今ではこの上なくしとやかな女性であるわが娘は、この上ない関心を集める威厳を備えていました。彼女は私の方を振り向き、うっとりとした表情で私を見、とても素敵な笑みを浮かべました。身のこなしを見ていると、彼女が父親を満足させて有頂天になっていることが分かりました。観察者殿、貴方ならほかならぬ父親を喜ばせようとしてあらゆる魅力を放っている洗練された娘のさまざまな魅力や表情の変化は私がお伝えするよりもうまく想像なされるものと思います。娘の恋人には、私がその日に感じた満足感の半分も理解できません。私が常々馬鹿げており軽蔑に値すると考えていることでこれほどの向上があったとはおそらく想像できなかったに違いありません。若い女性に自分の値打ちと気品を授けるためには、これに勝る方法はないものと確信しています。また、その値打ちを他人に手っ取り早く伝える方法もこれしかないと確信します。貴方がダンサーたちの中におっしゃっている軽率で気ままでどうしようもなく厚かましく陽気なダンサーに関しては、その身のこなしはダンスそれ自体のせいではなく、ダンサーのひねくれた才能のせいなのです。私自身はどうかと言いますと、私見では娘は素敵なダンスをしており、彼女のことは彼女の母親と同じくらいに誇りに思っています。娘がダンスをしているときの表情には母親譲りの潜在的な素晴らしい資質が伺えます。自分で口にするのもなんですが、娘が15分もダンスすると、慎み深い乙女、愛情のこもった妻、寛大な友、優しい母、そして寛大な女主人といった先天的な資質を明らかにしました。私は全力を尽くして娘の真価にふさわしい夫を獲得します。貴方が奨励なさったとき冷やかしておられるものと思っていたことに、今では宗旨替えをして感嘆しています。もしよろしければつぎの木曜日拙宅までお越しいただけますと、娘のためにダンスパーティを開きます。娘のダンスを見ていただけますし、場合によっては娘と踊っていただければと考えます。

敬具

フィリペイター

ダンスについては、しばらく前に、ウィーヴァー氏の論文について語ったことがあります⁸⁾。この論文は現在出版の準備に入っていると伺っています⁹⁾。彼は上述の問題点を非常に明白に扱っています。私はこれから確信したことなのですが、ダンスはきちんと統制すれば、正しい作法や美徳というものを受け入れることができない人にでも、本人が気づかないうちにこれを教え込むことが可能です。

マリアンヌのダンスを見れば、淫らな獣になることはなく、彼女に対するこの上ない敬意と評価となるのは確実です。私は先週、婦人の私室で一枚の絵を見せられました。この婦人は衣装を山ほど所有していました。これは同じ表情でも多種多様な表情を示すことができる衣装の力を見せ付けるためでした。マリアンヌがダンスをするとき、身のこなしや

8) 第334号(3月24日)参照。

9) 第476号に広告が掲載される。

姿勢や表情の変化が驚くべき効果を生み出すのは言うまでもないことです。

クロエは非常に奇麗ですが、同じくらい思慮に欠けた女性です。この愚かな女性の聴力はとてもよく、とても感じの良い容姿の持ち主ですが、愚かさは大変なもので、笑い方はひどく、気に入ろうとするやり方も馬鹿げています。そのため、彼女がダンスをするときは、頭先从から足の先までが間抜けとしか見えません。ご承知いただきたいのですが（ダンスは取るに足らぬことと考えられていますが）、思慮分別がない人が素晴らしいダンサーであったためしはありません。もしこれが真実であるとすれば、読者はこの金言を基にして、飛んだり、跳ねたり、くるくる回ったり、宙返りしたり、要するに、人間にしか出来ないようなダンスをするのではなく、多くの動物の方が上手にやる数限りない悪ふざけといった見当違いなダンスに対してどのように評価するか考えていただきたいと思います。

少なくとも美德をこの上なく好んでいると主張している私が、真面目な人たちが些細なことと見なしていることを懸命に奨励しているのだと付け加えますとおそらく奇異に思えるかもしれません。しかし、真面目な人たちには失礼ですが、真面目な人たちはこの件について十分お考えになっておられず、これを過小評価しているに過ぎないものと思います。また、自己正当化のために、私は優雅な喜びを与えているとする自然のあらゆるものを名誉と美德の場に持ち込もうとしているのだと言っておかなくてはなりません。おそらく、悪徳そのものは喜びを破壊し、美德そのものは喜びを導くのだと言えるかもしれません。豊かな財産があるという楽しみはきちんとした統制をすれば、この真実はあまり多くの議論をする必要ないでしょう。しかし、真に賞賛に値し、素晴らしいものと身体とはまったく無関係な魂の高邁さとの間には密接な類似点があることは誰にでも明白なことなのです。

第467号 1712年8月26日（火曜日）

私の才能が敢えて何を書こうとしても、
立派なあなたの目にどのように映ろうとも、
あなたの好みでどんな喜びを歌おうとも、
いかなる詩人も気高い分別以上には羽ばたくことはできない。
私の捧げるものが、あなたの賞賛あるいは軽蔑になろうと、
私のページを飾るパトロンとなるのだ。（ティブルス）¹⁾

神への賛美はあらゆる非凡な人の心に深く根差す感情です。そしてこの気持を強く抱く人々は人間と人間よりも劣った被造物とを識別する神性を帯びているように思われます。神ご自身は賞賛と感謝の祈りを非常に喜びます。私たち人間のもうひとつの務めは、私たち人間の欠陥を自認することにはかかなりません。これは同時に完全なる神を賞賛することになります。私たちがそれに値しなくなるときには、賞賛を嫌悪することになります。ロー

1) ティブルス『挽歌』4.1.24-27 ティブルスは1世紀のローマの詩人。

マ皇帝の中でも最も偉大で最も素晴らしい君主のことを称えたキケロとプリニウスの演説が二つ現存しています²⁾。皇帝たちは、まったく無関心で時代が大きくかけ離れた人たちでも感服して読まざるを得ない演説に大いに満足して耳を傾けたのは確実です。カエサルが十分長生きして栄光を手にしたのだと告白したとき、自分の人生は賞賛の息吹にあると思ったのです³⁾。他の人々は死んで初めて手に入る名声のために犠牲を払い、聞えなくなって初めて聞えて来る噂を得ようと腐心しているのです。しかし、長所と卓越によって、偉大かつ普遍的な名声を獲得することだけでなく、存命中にそれを享受することは、私たちが現世で望むことができる最高の幸福です。邪悪な人々は広く拡散しています。(刑罰は市民法によって定められていますが) 戒めのために犯罪者を懲らしめるためというよりは無実の人を思い止まらせるためのものであって欲しいと思います。善人はそれほど多くはいません。それは実際にお手本となる実物が少ないということ、また、私たちの敵意のために、他者の美德を喜ぶというよりもむしろ嘲笑して喜ぶ傾向があるためです。しかしながら、人間性の暗くて陰鬱な側面だけでなく、時には明るい側面を提示することは喜ばしいことだけでなく義に適ったことでもあります。おそらく、善なることの実践ということでは、見習いたいという気持は、非難すべきことに対して抱く嫌悪感よりも見習いたいという気持ちの方がより大きな刺激となります。一方はあなたのすべき事を直ちに教えてくれますが、他方はあなたが避けるべきことを教えてくれるに過ぎません。現在のところ、私はマニリウス⁴⁾ という人物を正しく評価するのが一番満足行く方法だと考えています。

マニリウスの並外れた一生を通して詳細な説明をすることは、現在の私の計画をはるかに超えることになるに違いありません。今は彼の引退時のことだけを扱い、今では彼のゆったりとした態度に威厳と尊敬の念を与えている名誉を獲得することになったさまざまな手腕や上品なマナーや下心のない誠実さについては触れないでやり過ぎたいと思います。彼は今渦巻く波を乗り越えて晴れ渡った安息の地に辿り着いたことを喜んで回顧します。彼は現在、人類の英知と習慣が最も有益だと考えたあらゆる美德を実践することに没頭しています。このように、彼は私的な生活の場でも、公的な場と同様に榮譽に満ちています。というのは、実際には、忙しく仕事に明け暮れている場合よりも、何もすることはなく静かな生活をしている場合の方が人目を引きにくいからです。仕事に明け暮れている人は、激しく動く体と同じことで、迅速な動作が必要なため、そこには、動きを止めますとしばしば消えてしましますが、輝きが付与されます。ところで、その輝きがまだあるとすれば、そこには外的な助けを借りずに光り輝く本来の価値の根源があるに違いありません。

2) キケロのカエサル賛美は『マルケルスについて』を参照。小プリニウスは100年、トラヤヌス帝を賛美した。

3) キケロ『マルケルスについて』8.25

4) ニコルスによると、マニリウスはクーパー卿とのこと。ウィリアム・クーパー(1665?-1723)は、大法官をつとめ、イングランド・スコットランドの合同を推進した。1710年のサシェヴェレル裁判では有罪票を投じた。サシェヴェレルは高教会派の聖職者で、名誉革命を非難し、その担い手であるホイッグ政権とゴドルフィンを攻撃し、煽動罪で裁判にかけられた。

彼の寛大さはまた、濫費と名づけていいほどのものです。寛大さは行過ぎた場合でも賞賛に値すると考えているのです。それはちょうど川は氾濫するときに最も豊かだというのと同じことです⁵⁾。マニリウスは善を行なうことをこの上ない楽しみとしています。彼は家庭では質素儉約を旨としていますので、これを水源としてよどみなく流れ出て来るのです。彼は寛大さを発揮できるときに死を企てる人を見下します。(この上なく喜ぶのですが)、彼は自分が授けるものを見て楽しみます。彼は気前よさの生きた執行人なのです。一方、幸運にも彼の恩恵に浴する人たちは彼の長命ならびに自分自身の好運を願います。誰もが彼に恩義を感じます。彼は自らを最高度に高める適切な方法が分かっています。どん底になるほど不幸な人たちと比較してみると、彼の場合は、善良さが十分な保証書となっています。彼については、ピンダロスが詩神にテロンについて語らせるのと同じことが言えるかもしれません。

テロンは確かに誓った、周りの人は誰一人貧しくはさせないと。
 いまだかつて、これほどの優美なわざをもったことはない。
 運命の女神の景品をふんだんに分け与えるのだ、
 うらやましく思わない手と限りない心でもって⁶⁾。

アッティクスは万人の愛と尊敬を獲得することも、両極端な抗争する二つの党派の間に入ってうまく泳ぐことも出来ませんでした⁷⁾。不思議なことに彼が幸運だったのは、彼はどちらの党も過度の熱意をもって支持しないのですが、賞賛されるだけでなく、さらに珍しく稀な幸運ですが、双方から愛され暖かくもてなされたことです。私はいまだかつて、年齢、男女を問わず、マニリウスの美点に心を打たれた人に出会ったことはありません。ある特定の人たちに受け入れられる人は大勢いますが、ほかの人々はこういった人々に対して冷ややかで関心を寄せません。マニリウスはすべてを喜び喜ばれるために投げ出した最初の人物です。彼が居るところではどこでも賞賛され、彼の居ないところではどこでも嘆かれるのです。彼の美点はラファエロの絵画のようにもてなされ、みんなから賞賛されるか、少なくとも、誰一人、このような大きな賞賛を受けている作品が分からないと打ち明ける勇気がないかのどちらかとなります⁸⁾。嫉みや悪意は、中傷と悪口にふけることは自分たちの利益に反すると考えます。彼に対する賞賛を敵が減じたり、味方が増やしたりするのは難しいことです。彼の名声に挑戦することは確実に自らの名声を減ずることになります。彼の名声を傷つける方法は一つしかありません。それは彼に対する正当な賞賛を拒絶し、強情に沈黙を決め込むことです。

服装に気を配ると彼の値打ちが下がります。身なりは心の表象に過ぎず、品が良く、飾り気はなく、気取ることはありません。彼は、金や刺繍をちりばめても自らの評価の足しにはならないことが分かっています。また、彼は、贅を尽くした華美な服装には関心がな

5) ナイル川のこと。

6) カウリー、*the Second Olympique Ode*, 175-9

7) 第385号参照。

8) 第226号参照。

く、飾り気のない服装に輝きを与えることを知っています。それでも彼は部屋の中では中心人物となります。まるで他の人たちよりも強烈な光が当てられているかのように、彼は注目されるのです。

彼を見ていますと、私は有名なビュッシー・ダンボワの話思い出します。誰もがこの上なく壮麗な服装で登場する宮廷の集まりの場で、ビュッシーは自身の優れた振る舞いを信じて、他の人たちのように飾り立てることはしないで、自分は質素な服装をし、召使たちには調達できる最高に華やかな服装をさせたのです⁹⁾。その結果、宮廷中の人々の目が彼に釘付けになったのです。彼一人が上流人士の雰囲気醸し出し、他の人たちは全員、彼の従者のように見えたのです。

アリストイッポス¹⁰⁾のように、姿とか身分がどんなものであっても、彼は屈託がなく、個性という点で差をつけるのです。彼は寛大な現在の境遇に完全に対応していますが、彼の公正な判断力が野心に傾くことを見事に留めていますので、現在の楽しみ以上の何かを願ったり追求したりするようなことはしないでしよう。

ことある度に彼から思いやりに溢れたことが数限りなく流れ出します。これらは常に公正で自然なことですので、彼がそうするのに苦心したとは全く考えられません。他人には見えなくしていたに違いないが、彼らの目の前にあるこういった財宝を彼に開示して見せたのは、思いやりの守護神ダイヤモンドだと人々は考えるに違いありません。彼が話をするのを耳にするときの喜び、彼の丁寧な振る舞いから受け取る満足感に匹敵するものはほかにはありません。彼の表情は、暗黙のうちに、善なること賞賛に値することを推奨し、淫らで法外なことを叱責しているのです。彼は押し付けていると思われずに率直で隠し立てをしていなく、控え目と思われずに慎重であると見られる方法を知っています。彼の沈着冷静な話は常に機知とユーモアで活気づけられ、愉快的話には明らかに心地よだけでなく、啓発的な何かが加味されます。したがって、彼と一緒にいますと、理性を犠牲にするほど陽気にはならず、上機嫌さを失うほど深刻にならずにすみます。彼は両極端の気質がうまく混ざり合っており、共に表れるときもあれば、交互に表れるときもあります。要するに、彼の振る舞いは抑制や投げやりからは等しくかけ離れており、人心をつかむ一方で、敬意を集めるのです。

彼の身のこなしには愛嬌のある穏やかさがありますので、彼が、往々にしてその余地さえあれば必ず露になる荒々しい感情に駆り立てられるなんてことは考えられません。彼の気質は怠惰と激しさのちょうど中間にあります。彼は自分の気持ちに従うところではどこでも、穏やかで物静かです。だが、彼は、国王、国家、友人のためならいつでも力強く決断力を発揮します。

9) サン・テヴルマン「公爵夫人マザランへの手紙」にこの話が登場する。

10) ホラティウス『書簡詩』1.17.23

第468号 1712年8月27日（水曜日）

【ステイール】

彼は聡明で鋭敏で頭の切れる人だった。彼には快活さは言うまでもなく、機知と風刺がふんだんに備わっていた。（プリニウス）¹⁾

私の新聞は一種の会報ですが、仕事というよりもむしろ社交の場の出来事に注意を払っています。大変申し訳ありませんが、私は目下、浮かれ騒ぎとか機知とか楽しいこととかユーモア好きなすべての人にとってとても重要な事情を抱えています。つまり、気の毒なことにディック・エストコート氏が亡くなったのです²⁾。何時間も愉快的な時を過ごすことができたのは、彼のお陰です。そこで、感謝しても仕切れませんが、ほんのささやかな償いとして、あのように感じの良い人が亡くなったことに対してしばらく悲しみに浸りたいと思います。お気の毒なエストコート氏。私がこの前出会ったとき、素晴らしい演技をする彼の才能について町の人々に明らかにしようと企てていたのです。要するに、若手の役者たちにどのように喋り、どのように感情を表現するかのお手本を示そうと考えていたわけです。彼は目の前にあるものの欠陥を鋭敏に察知しますので、立派で公正だとされていることの馬鹿げた側面を思慮に欠けた人たちに対しても一瞬にして示すことができました。もちろん彼は美の知識にも長けていました。おそらく、当意即妙のやりとりだけでなく、巧みな言い回しの誉め言葉を口に来る人は、イングランドではエストコート氏に勝る人はいないことでしょう。このことは話術に対する彼の類い稀な能力を見れば容易に理解できました。彼は話の中に、自然かつ思いがけない出来事を差し挟み、ある人へは機嫌取りをし、またある人はからかうのでした。また、相手が優しいあるいは辛らつな言葉に耐えられるかどうかで、言葉遣いを変えました。考えられないほど好ましいわざを駆使して、悲しげな気分を催させ、場違いな陽気な気分を抑えるコツを知っていました。彼について語り続けることができないほどいろいろなことが私の記憶に蘇って来ます。墓堀り人から国王の道化の頭だと言って渡された頭蓋骨を手にしたハムレットは、とても愉快的思い出に耽り、友に向かって言います。

ああ、哀れだな、ヨリック！よく知っていた男だよ、ホレイショー。しゃれは底ぬけ、頓知はきりが無いという奴だった。数え切れないほどたびたびおれを背負ってくれたものだが、こうなってみると、思っただけで胸が悪くなる！吐気がする。ここに何回とも分からないほどおれが接吻した唇がついていたのだな。どこへ行った。お前の皮肉は？あの道化踊りは、あの歌は？いつも食卓中の人々を沸かせた、ひらめくような洒落はどこへ行った？いま歯をむき出しにしているこの自分の顔に、何一つ浴びせてやれないのか？——文字通り顎が外れたか？では御婦人がたの部屋へ行ってこう申しあげてこい。いくら厚化粧なさっても、いずれはこんな顔になるんですよ。そう言って笑わしてこい³⁾。

1) プリニウス『書簡詩』3.21

2) リチャード・エストコート（1668-1712）は喜劇役者。第264号、第358号、第370号にも登場。彼は、8月27日の本日、セントポール大聖堂に埋葬された。

自分たちに備わっている品性を境遇のせいにするのは、裕福な人たちにありがちな傲慢な行為と言えます。したがって、心の高揚を非難するような低劣の人の価値を認めざる得ない場合には、彼らはその素晴らしい資質を力なく褒め称え、あのような人物にとっては極めて珍しいことだと言うことがよくあります。会話での頭の回転の早さ、発生した緊急事態での適切な判断力、そして、潔白で不快感を与えない振る舞いが、たんに陽気さと気晴らしを与えるだけだと受け止められてそれ以上にはその人の名声を高めることができないのは、ひとえにこの気質のせいなのです。しかし、エストコート氏はそのような状態であっても、優れた才能の持ち主のように恬淡としていました。みんなが考えているように、楽しませることが自分の仕事だと思っていましたので、仕事に過ぎないということが悩みの種になったのですが、彼はありとあらゆる見せ掛けの積極性を発揮して人々を楽しませたのです。彼の優秀さが分かっている分別のある人たちは、彼が会話を先導し、彼流の振舞いをするに満足しました。しかし、彼を物真似へと駆り立てる愚かな人たちは、自分たちのお金でそうしていることに彼が憤慨しており、道化になるのを妨げられている仕返しに、思い上がった重々しい人物の姿を自分たちの要求に従ってしゃれとして示しているだと考えました。

この注目すべき友の特に優れた点は、人々の人格や感情について説明するとき、体面や振る舞い方を攻撃するだけでなく、語りの中でその人たち自身の考え方になり、最低の判断力しかない人だけでなく、最高の機知を備えた人物の場合でも、これを詳細に語ったということです。誰にでも考えられるように、真似られることに我慢がならないのは、脆さに対する自己愛の大きな例であることは確かです。彼のことを恐れたのは、虚栄心の強い人、うわべだけの人、高慢な人、あるいは、欠点を修正できない人だったのです。それ以外の人にとっては、彼はこの上なく愉快的な人物でした。私はこれまでこれほど偏りのない満足感を味わったことはありません。私が彼を不機嫌にさせたとき、彼が苛立つことはありませんでした。実際、私が自分のことをほとんど気に掛けないのも、私が書物から知った哲学というよりも彼の素晴らしい才能のせいなのです。私は姿形、風采、マナー、話し方、あるいは、物腰について何を言われても平気なのです。私が意志の墮落となること以外に私の価値を減じるものが何もないという幸せな状態になったのも、ひとえに気の毒なエストコート氏のお陰なのです。

彼がしばしば上手な役者ではないと言われたのは、私からすると非常な驚きです。これは彼の前任の役者たちへのえこひいきによるもので、演技そのものよりもむしろそれまでの比較のせいに違いありません⁴⁾。『北国の恋人』のブルフィンチや『心優しき夫』の退屈な狡猾さと快活さを醸しだすパウンスのように⁵⁾、機知と機敏さによって表情に常識の

3) 『ハムレット』5幕1場。

4) シバーは、エストコートの物真似の技術は称えるが、全体としては迫力に欠け、感動を与える役者ではないと考えた。

5) ブルフィンチはリチャード・ブルーム『北国の恋人』に登場する判事。エストコートは1711年2月13日と12月31日にドゥルーリー・レイン劇場でこの役を演じた。パウンスはスティールの喜劇『心

かけらも見えないとき、彼は役者ですので、彼の能力と役者としての成功に異論を差し挟むのは馬鹿げたことです。

哀れなエストコート氏よ、虚栄心に満ちた高慢な人は眠らせてあげるのです。貴方はもはや彼らの自己愛を邪魔することはなく、貴方はもはや生活費を稼ぐために貴方の美点の分からない愚かな人たちを楽しませるためにあくせくすることはありません。

世間の邪魔者が眠り、人々に楽しみを与えることができる人が私たちの元から引き離されることに注意を払わないとき、多くの人々が死について考えるのは当然です。私自身はどうかと言いますと、今お話をしていますとても素晴らしい才能の持ち主が亡くなることは、市の事例としては主張が騒々しく有害なそれほど高名でない人の死亡よりも物悲しいものになると考えざるを得ません。

ところで、もっと簡潔に、観察者として、この非凡な人物の説明をしなくてはなりません。これまでも現在も彼に匹敵する人はいません。彼は友であり、話のできる人です。運命によって、彼は最低の人たちに追従せざるを得ませんでした。彼の卓越した資質のお陰で最も洗練された人物になることが出来ました。私は最も洗練された人たちに囲まれて彼と一緒に一晩中過ごしたことがあります。(そう望まれていることが彼には分かっていたのですが)彼は終始彼が話をリードし、誰の気分を害することもなく、それでいて距離を保ちながら、非常に楽しく喋る彼の表情には上機嫌さが保たれていたのです。彼は実に魅力的に話をしましたので、これを読む人誰もが必ずありあまる陽気さに悲しみを、われんばかりの笑いに涙を禁じ得ないものと確信します。本日の紙面が愛すべき彼へのはなむけになることを願っています。私の目には涙があふれこれ以上話を続けることは出来ません。

第469号 1712年8月28日(木曜日)

【アディソン】

人から何かを不正に奪ったり、他人を貧窮させたりして
自分の財産を増やしたりすることは、死や極貧や苦痛やその他
身体あるいは生活状態に降りかかるどんなことよりも、
自然に反することです。(キケロ)¹⁾

独力で富や名誉を獲得するよりもむしろある特定の友人や資産家の助けを借りる機会に恵まれない場合、高い地位を得ようとする高潔な人はほとんどいないものと私は確信しています。誠実な人にとって、最高の特典は善行の人に与えられる強みなのです。

政府の高官に仕えており、それを活動の手段にしている人たちは、同情や善意を行使する機会はしばしば上司よりも多くあります。彼らは高官の元に届く事例は小さいものでも

優しき夫』に登場する弁護士。1711年1月11日と5月10日にこの役を演じた。

1) キケロ『義務論』3.5.21

すべて分かっています。もし彼らが誠実な心の持ち主であれば、貧困は専念するその人物の取り柄と考え、その人物のために最も強力な擁護者としてその訴訟を公正に判断します。こういった気質の人は、実業のポストについての場合、人々にとって恩恵となります。こんな人であれば、孤児や寡婦を保護し、友のない人を助け、無知な人を導きます。説明の仕方が分からない人の主張を退けることもありませんし、謝礼が払えないからといって、仕事を投げ出したりするようなことはしません。要するに、彼には寛大で同情を寄せる有益なことをする機会がふんだんにあるわけです。

気難しく素直でない人とか人と接触すると不安になるような人は、責任のある仕事には不向きです。気性の荒い人は臆病な人や控え目な人を当惑させる傾向があります。高慢な人は、みすぼらしく最も助けを必要とする人を尻込みさせます。気の短い人は、用件を聞く余裕がありません。ふさわしくない資質がいくつかある役人は、上司の見当違いや教唆を寄せ付けないためには適任者と見なされることがあります。しかし、これだけでは往々にして生起する不正の償いをするには出来ません。

責任のある仕事にどう見ても不向きなひどい資質があと二つあります。その一つはのろいことです。これは意図しないで数多くの残酷な行為を犯すこととなります。官職についている人は、日常生活における人の行為として何名かの人が定めている「今日出来る事を明日しようと考えてはいけない」²⁾ という格言に背くべきではありません。やるべきことを引き延ばす人は、引き延ばしている間は、不正の罪を犯しているのです。仕事を手早く済ますことは、仕事そのものと同じように、しばしば擁護者に利益をもたらします。要するに、遅延によって生じる不都合と遅延によって手に入るささやかな動機と利点を比べて見ると、頼ってくる人に往々にして取り返しのつかない不利益を生じさせる、同時に、ほんのささやかな尽力で修復できる過ちを犯さないで済みます。

最後に、少しでも違法行為をする可能性のある人は、実業界では不向きです。こういった人は何か口実をつけて定まった疑問の余地のない料金以上の額を手に入れます。心づけ、感謝のしるし、割戻し金といったもっともらしい言い方が、しばしば違法行為が身を隠している口実となります。しかしながら、誠実な人はこういった方法を容赦できないものと考え、信用と名声で獲得したほどほどの財産で満足し、強奪と不当な要求で獲得する度を過ぎた汚れた財産を手に入れようとはしません。どんな仕事であっても、こういった確固とした誠実さをもって行なうとしたら、よくあるありふれた能力で法外な富を築くような人はいつの時代であっても見掛けることはありません。こういった腐敗は主として、教養教育を受け、知識と美徳の教育を積んだ人物ではなく、志願してくる最初の人物や世知にたけた人物を雇う人たちから生じると考えざるを得ません。

一般に仕事に専念するときは、世知にたけた人よりも学問を身につけた人の方が誠実さを発揮すると言えます。その主たる理由はつぎの通りです。若いときに読書に時間を費や

2) 第283号参照。バジェルによると、これはイタリアの格言とのこと。イギリスでは14世紀初頭に登場。

した人は、美德を称え、悪徳を非難する習慣が身についています。一方、世事に時間を費やした人は往々にして悪徳が勝利を収め、美德が当惑しているさまを目にします。書物では破廉恥との烙印を押されているゆすりや強奪や不正が、世間ではしばしば頭角を現し、その一方で、著者から寛大、率直、気立てのよさだと称えられているいくつかの資質は、貧窮と没落の原因となるのです。気質や信条が善良および邪悪な人たちにそれに見合った結果をもたらさざるを得ません。

学問を身につけた仕事に有能な人を雇うことには、少なくとも、彼らに奥ゆかしい幸福が訪れること、さらに、価値のないつまらない人物が突出するのを見ないで済むという利点があるに違いありません。